学位請求論文審査報告要旨

2018 年 2 月 14 日

学位請求者　ガラハーニー・ファテメ
論文題目　　日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略と重訳の影響

論文審査委員　　糟谷　啓介
イ　ヨンスク
庵　功雄

１．本論文の目的と構成

翻訳とは、起点言語で書かれたテクストを目標言語に移し替える行為である。翻訳が機械的な記号の置き換えではない以上、翻訳の際に出会った問題に対して、翻訳者はさまざまな種類の翻訳方略（translation strategy）を用いてその問題を解決することになる。その方略は起点言語と目標言語の関係が変わればおのずと変化する性質をもつ。本論文の目的は、日本語のテクストがペルシア語に翻訳される際に、どのような翻訳方略が用いられるのか、そして、英語を介した重訳が翻訳過程にどのような影響を及ぼすのかを追究した論文である。論文の構成は以下の通りである。

第１章　はじめに
　1.1　研究の背景と目的
　1.2　研究方法
　1.3　論文の構成
第２章　翻訳理論
　2.1　等価理論
　2.2　翻訳方略
　2.3　受容化・異質化
　2.4　ヴィネイとダルベルネによる翻訳方略
　2.5　デノテーションおよびコノテーション
　2.6　イランにおける翻訳の歴史
　2.7　重訳
第３章　先行研究
第４章　研究方法
　4.1　分析対象
　4.2　分析方法
第５章　分析と考察

5.1　擬音語・擬態語
5.2　色彩語彙
5.3　社会言語学的次元の表現
5.4　異文化要素
5.5　著者の特有表現
第６章　おわりに
結論
参考文献

２．本論文の概要

第１章では、本論文で行われる研究の背景とその目的、研究方法、論文全体の構成が簡潔に述べられる。

第２章の前半では、本論文の基礎となる翻訳理論の概括、本論文で用いられる主要な概念と分析方法が説明される。翻訳理論はＥ・ナイダによる「等価性（equivalence)」概念が出発点となって発展してきた。起点言語の表現と目標言語の表現が「等価」となることがナイダの目指す翻訳の目標である。しかし、起点言語と目標言語のあいだには、言語的、文化的、社会的なずれが生じるので、そのずれを最小限にとどめるように調整することが求められる。このために用いられる方法ないし手順が「翻訳方略」である。翻訳方略には、テクストの全体の訳出の方針に関わるマクロ的なレベルと個々の表現の訳出のしかたに関わるミクロ的なレベルがある。前者の代表的なものがヴェヌティの「受容化」と「異質化」という方略であり、後者の代表的なものがヴィネイとダルベルネの提唱した方略である。本論文の独自性は、ヴェヌティの理論とヴィネイとダルベルネの理論を組み合わせるかたちで分析が行われる点にある。本章の後半では、イランにおける翻訳の歴史とそこにおける重訳――すなわち、ある言語から別の言語に訳されたテクストをさらに別の言語に訳すこと――の役割が述べられる。これまでの研究では、重訳は状況に迫られたやむを得ないものか必要悪ととらえられることが多かったが、著者は、重訳が生産的な翻訳研究から除外されるべきではないという意見があることに注目する。

第３章では、異文化要素を対象にしたときの翻訳方略に関する先行研究と重訳の問題をあつかった先行研究がまとめられるとともに、それらと対照するかたちで本論文の独自性が述べられる。とくに、日本語から英語、さらにそこからペルシア語への翻訳という過程に注目した研究はこれまでにないので、その点に本論文の意義が求められる。

第４章では、本論文で取り上げられた研究対象と用いられた分析方法が述べられる。対象としては、川端康成の『掌の小説』と吉本ばななの『ハードボイルド／ハードラック』が取り上げられる。これらのペルシア語訳は英語訳に基づいていることが明示されている。分析のやり方は、日本語の原文と英語、ペルシア語の訳文を対照させるだけではなく、ペルシア語の訳文を構成する形態素の意義と文法機能を示し、さらに著者自身が日本語から直接訳出を試みたペルシア語の表現を対照させるという形をとる。

第５章は本論文の中心をなす部分であり、対象とするテクストの日本語の原文に対する

英語の訳文と重訳によるペルシア語の訳文、さらには著者による日本語からペルシア語に直接翻訳した訳文が比較され、重訳の影響が分析される。分析の焦点となるのは、「擬音語・擬態語」「色彩語彙」「社会言語学的次元の表現」「異文化要素」「原著者による特有表現」である。このなかで「社会言語学的次元の表現」においては、「挨拶」「呼称」「一人称代名詞・二人称代名詞」「敬語表現」が扱われる。また、「異文化要素」においては、「生態」「物質的文化」「社会文化」「組織、風習、活動、手順、概念」「ジェスチャー」が扱われる。

この分析を通して著者が注目するのは、ペルシア語には日本語の表現を適切に翻訳しうる表現があるにもかかわらず、英語を通したために適切な翻訳がされていない例が多数発見されたことである。たとえば、ペルシア語には、日本語と似たような敬語表現が存在するが、英語への翻訳を通したために、原文の敬語表現が表わす意味が適切に訳文に反映されていない場合がある。ただし、日本語とペルシア語の敬語体系には違いもあり、ペルシア語の場合には、豊富な尊敬語が発達しているのに対し、謙譲語がそれほど見られないので、敬語の翻訳の場合には、ペルシア語の特徴を最大限に利用すべきであるという判断が下される。また、重訳によるペルシア語の訳文は、ほとんどがヴェヌティのいう受容化方略によるものであることが明確にされた。「受容化」とは、目標言語における「自然さ」を目指す方略であるが、それによって異文化要素の異質性がかえって覆い隠される結果にもなる。そこで著者は、ペルシア語に適切に対応する表現が見いだせない異文化要素については、むしろ「異質化」方略によって訳出し、意味の理解のためには注釈などの手段を用いることが望ましいと主張する。

第 6 章では、本論文で行われた分析の全体の結果がまとめられる。そして、重訳の影響が実際の訳文にどのように現れるかを分析した結果、重訳がいまだ不可欠な手段であるような環境においては、具体的にどのような表現を対象にしたときに重訳の欠点が現われるかを知ることが、翻訳者によって重要な指針となりうると指摘される。

3　本論文の成果と課題

本論文の成果は、翻訳理論の枠組みに基づいて、川端康成の『掌の小説』と吉本ばななの『ハードボイルド／ハードラック』のペルシア語訳における重訳の影響を具体的に明らかにした点にある。とくに以下の点に見るべきものがある。

ひとつは、重訳の問題を「翻訳方略」の観点から検討した点であり、とくに、ヴェヌティの「受容化／異質化」の概念とヴィネイとダルベルネの「直接的翻訳／間接的翻訳」の概念を組み合わせた点に著者の工夫が見られる。どちらかといえば、ヴェヌティの概念はテクスト全体に関わる「全体的方略」であり、ヴィネイとダルベルネの概念は個々の語句の翻訳に関する「局所的方略」とされることが多いが、この二つを組み合わせることで、翻訳方略が具体化されるプロセスを見事に可視化することができた。

また、分析の徹底性も評価するべきである。本論文では上記のテクストから全部で 72 の例文がとられ、そのひとつひとつに、日本語原文、英語の訳文、重訳によるペルシア語訳とその日本語訳、日本語から著者が直接訳したペルシア語の訳文とその日本語訳が並べられ、しかも二つのペルシア語の訳文には、それらを構成するすべての形態素の機能と意味

が表示されている。こうした緻密な分析を経ることによって、日本語からペルシア語に至る翻訳プロセスにおける方略の具体的なあり方を手に取るように示すことができた。しかもその分析は丁寧で緻密であるので、個々のテーマに即したかたちで、きわめて興味深い考察が各所で述べられている。それは日本語とペルシア語との対照言語学的考察だけでなく、翻訳理論一般に対しても貴重な貢献となる洞察も含まれている。この点に本論文の長所が認められる。

しかし、本論文には以下の弱点が見られる。

ひとつは、例文に関して、翻訳の成功と不成功をめぐる判定が一貫していないところがある点である。とくに、デノテーションとコノテーションという概念を用いたことがかえって議論がわかりにくくなった要因になった面もある。これらの概念の定義をさらに明確にしてから議論を進めていれば、不必要な議論の混乱は招かなかったであろうと思われるだけに残念である。また、翻訳の多様な側面のうち「異文化理解」ないし「異文化紹介」の面だけを強調しすぎたために、重訳に関する議論が深まらなかった箇所も見られる。

もうひとつは、せっかく「重訳」という現象に注目し、それが単なる「必要悪」ではなく、翻訳理論にとって正当な対象であることを認識していながら、最終的には、「重訳」のネガティヴな面だけが浮き彫りになってしまった点である。このことを避けるためには、以下のようなやり方を取るべきであっただろう。すなわち、小説のすべての文に関して、この論文でやったような分析をあてはめて検討した上で、重訳であってもどのような翻訳方略を用いれば成功した訳文に達することができるかを示すことである。本論文では翻訳に関する様々な方略が検討されているので、それらが適切な訳出にどのように効いたのかを定量的にも検討すれば、より一層分析が深まったのではないかと考えられる。

とはいえ、上記の弱点は著者もよく認識しており、本論文で示された著者の力量をもってすれば、今後の研究の発展によって乗り越えられるはずのものである。本論文が日本語からペルシア語への翻訳過程を論じた研究として優れた成果であることに変わりはない。

４．結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、本論文の著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果の要旨

2018 年 2 月 14 日

学位請求者　　ガラハーニー・ファテメ
論文題目　　日本語ペルシア語間翻訳における翻訳方略と重訳の影響
論文審査委員　　糟谷啓介　　イ ヨンスク　　庵 功雄

2018 年 1 月 23 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者　ガラハーニー・ファテメ氏　の博士学位請求論文「日本語ペルシア語間翻訳における翻訳方略と重訳の影響」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、ガラハーニー・ファテメ氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力をガラハーニー・ファテメ氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。